

院し、生検で良性多形性腺腫の病理組織診断を得た。また、造影X線写真では、患側鼻咽腔への膨隆を示していた。

4月16日、全身麻酔下に、腫瘍の剝離摘出を行った。欠損部は、正中を越え、右側軟口蓋後縁より約7mm前方に至る40×45mmの大きさであった。鼻咽腔側は、粘膜一層を残し、口蓋帆張筋、口蓋帆挙筋、口蓋舌筋の一部が露出した。再建は、右側硬口蓋から一部歯槽突起にわたる大口蓋動脈静脈を茎とした粘膜骨膜弁を形成した後、大口蓋孔から、神経血管束を愛護的に引き出し、充分に可動性をもたせた。ついで、この弁を180°回転し、軟口蓋欠損部を縫合後にテラマイガーゼを置いて tie over 固定を施した。患皮部の露出した骨面には、凍結乾燥豚皮を用い、同様に固定した。

術後は、弁の色調も良好であり、硬口蓋患皮部の上皮化も速やかで、術後の機能障害もなく、良好に経過している。今後、義歯装着の予定である。

演題3. エプーリスの病理学的検討

第1報 症例の概要

○福田容子, 沢口通洋, 石川富美子, 戸塚盛雄
菊地博生*, 武田泰典*, 鈴木鍾美*

岩手医科大学歯学部歯科予診室
岩手医科大学歯学部口腔病理学講座*

エプーリスは古くより用いられている病名であるが、その病理学的分類と定義については種々の見解があり、未だ統一をみていない。演者らはエプーリスの本態を解明する目的で病理学的に検討を加えているが、今回は症例の概要を報告した。

検索材料は、1966年より1985年4月までの間に本学口腔病理学講座において取り扱った生検および手術材料6851例の中で、エプーリスと診断された193例(2.8%)である。性別では男性64例、女性128例、不明1例で男女比は約1:2で女性に好発していた。

病理学的分類は石川・秋吉の分類に準じたが、その内訳は線維性エプーリス70例(36.3%)、骨形成性エプーリス55例(28.5%)、肉芽腫性エプーリス25例(13.0%)、末梢血管拡張性エプーリス16例(8.3%)、血管腫性エプーリス14例(7.3%)、線維腫性エプーリス4例(2.1%)、先天性3例(1.6%)、不明6例(3.1%)であった。組織型よりみたエプーリスの初診時の大きさは、大豆までのものが全体の約半数を占め、大半が桜実大までの大きさであった。鶏卵大以上の巨大なエプーリスは線維性エプーリスに1例、骨形成性エプーリスに2例認められた。発症部位別には各組織型とも前歯部に好発しており、上

顎にやや多かった。骨形成性エプーリスでは他組織型よりも臼歯部に発症する割合が高かった。発症年齢は0歳から77歳までであったが、20歳未満と60歳以上の発症頻度は低かった。発症年齢を組織型別にみると、線維性エプーリスは40~50歳代に多く、骨形成性エプーリスは20歳代と50歳代に多く発症していた。血管腫性エプーリスは20~30歳代に発症する割合が高かった。

質 問: 深 沢 肇(口外2)

線維腫性エプーリスと線維性エプーリスを分けておりますが、分類についてのコメントを下さい。

追 加: 我々も昨年7月の第22回日本口腔科学会北日本地方部会(札幌)にて、エプーリスの41例に関する臨床的観察を発表しておりますが、我々の発表では、線維腫性エプーリスは、1例もなかった。41例の内訳は、線維性エプーリス16例、骨形成性エプーリス16例、肉芽腫性エプーリス5例、血管腫性エプーリス4例でありました。

回 答: 福 田 容 子(予診)

どちらも線維成分の増成により成りますが、線維腫性エプーリスは線維腫と同様の組織像を呈し、上皮が圧偏されております。また尖症性細胞浸潤も線維性エプーリスの方に著明にみられます。

質 問: 坂 倉 康 則(口解2)

骨形成性 EP について

1. 骨形成性 EP では、骨形成の状態は、病理所見にはどうであったか。
2. 骨形成性 EP の骨形成に関わる細胞は、どのような細胞であったか。

回 答: 福 田 容 子(予診)

骨形成性エプーリスについては後ほど報告する予定です。

質 問: 上 野 和 之(保存2)

血管腫エプーリスの中で、妊娠腫はどの程度含まれておりましたでしょうか。

回 答: 福 田 容 子(予診)

血管腫性エプーリス14例(男性2例、女性12例)のうち妊娠腫は9例ありました。

質 問: 大 屋 高 徳(口外1)

欧米では、giant cell granulom も多く報告されていますが、本報告では認められませんでした。giant cell reparative granulom は、epulis に入れて宜しいものなのでしょうか。

回 答: 福 田 容 子(予診)

peripheral に発症した場合は giant cell epulis に入れてよいと思います。

追 加: 武 田 泰 典(口病理)

エプーリスの分類は欧米と本邦では著しく異なり、欧米では congenital, giant cell そして一部の義歯性線維

腫のみをエプーリスに入れてあります。従って、本邦においてエプーリスとされているものを見直して、それらの病理学的扱い方を如何にするかを目的として本研究をはじめました。今後各症例における詳細を引き続き明らかにしていく予定ですが、臨床各科の先生方の御理解をお願い申し上げます。

演題4. 大脳皮質体性感覚領 SI への歯髄性入力は視床の何処で中継されるか？

○松本範雄, 奥田和久, 佐藤 匡
小笠原幸三郎, 鈴木 隆

岩手医科大学歯学部口腔生理学講座

ネコの大脳皮質第一体性感覚領 (SI) の口腔投射野において、歯髄刺激に応じる細胞 (TPD neuron) は応答様式から、① 20msec 以下の短潜時で応じる F-type, ② 20msec 以上の長潜時で応じる S-type および③ F-type の放電様式に after-discharge を伴う Fa-type の3種に大別される。これらの neuron への歯髄性入力が視床のどの核で中継されるかを形態学的ならびに電気生理学的手法を用いて調査した。

HRP の逆行性軸索輸送を用いて口腔投射野がどこから入力を受けるかを調べた。視床において HRP 標識細胞は、口腔投射野の広範な部位へ HRP を注入した場合には同側後内側腹側核 (VPM) 固有部の内側部、髄板内核群の外側中心核 (CL) と中心旁核 (Pc), および正中中心核 (CeM) に分布していたが、限局した部位へ HRP を注入した場合には VPM の固有部内側部のみ見いだされた。また、両注入例において、注入部位にほぼ対称的な位置の対側 SI 第三層の深部に標識細胞が分布していた。

口腔投射野において歯髄刺激に対する F-および S-type の TPD neuron の活動を peri-stimulus time histogram として記録した後、HRP 標識細胞が見られた対側 SI を約28°Cに冷却し、それらの応答確率が変化するかどうかを4例について調べたが、いずれの場合にも明白な変化を示さなかった。一方、同側 VPM へ1% lidocaine 1~2 ml を注入してその効果を調べたところ、S-type の応答確率は明らかな変化を示さなかったが F-type のそれは著しく減少した。

VPM 固有部内側部において TPD neuron を検索し、それらの放電様式を調べたところ、得られた19 neuron すべてが F-type であった。

髄板内核や CeM で記録される TPD neuron の放電様式をまだ確かめてはいないが、以上の結果は口腔投射野の TPD neuron の内で F-type への入力は VPM で、ま

た S-type への入力は髄板内核か CeM で中継されることを示唆している。

質 問: 小豆島 正 典 (歯放)

VPM に lidocaine を injection したという事ですが、lidocaine は VPM で synaptic transmission を block しているとお考えでしょうか。あるいは単に conduction を block しているとお考えでしょうか。

回 答: 松 本 範 雄 (口生理)

Lidocaine は同じような濃度で conduction block と transmission block をおこすことが知られているので、両方によると思われます。

演題5. 歯胚の三次元的培養法とその微細構造について

○坂倉康則, 石関清人, 立花民子, 名和橙黄雄

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第二講座

歯胚の培養には filter 上で培養する Trowell 法が主に用いられているが、歯胚の三次元的成長は望めない。そこで我々は、三次元的成長の可能な培養法を考案し、培養歯胚の三次元的形態を Trowell 法と比較検討した。また、その微細構造の観察と石灰化基質の元素分析を行った。

17日マウス胎仔の下顎第1臼歯胚を用い、ダルベッコ変法 MEM に10%仔牛血清, 1 mM L-プロリン, 150 μg/ml アスコルビン酸, ストレプトマイシンとペニシリンを添加した培養液で10日間培養した。気相は 5% CO₂+50%O₂+45%N₂の混合ガスを用いた。考案した培養法では、大きなくぼみをもつ1.5%寒天ブロックの底に歯胚を置き、その寒天周囲に培養液をそそぎ、この状態で incubator に移した。培養液の流入にともなって、歯胚は自ら浮上し、気相と培養液との境界面に位置するようになる。培養液は2日毎に交換した。通法の二重固定を行い、実体顕微鏡観察後、非脱灰 Epon 切片による光顕・電顕観察を行った。元素分析には2.5%グルタルアルデヒド単固定の試料を用いた。

実体顕微鏡下で咬頭隆起と基質形成が認められた。咬頭面では5咬頭が確認でき、方向性の決定も容易であった。光顕的には象牙芽細胞・エナメル芽細胞が分化し、象牙質・エナメル質による咬頭形成がみられた。電顕的には象牙質とエナメル質に針状結晶がみられ、エナメル質の結晶は小柱様構造をとりながら配列していた。また、エナメル質に隣接して多量の Stippled material が蓄積し、所々で結晶の延長線上に配列するかのような stippled material がみられ、エナメル質結晶形成への参画を思わせる所見が得られた。X線微小分析の結果、カルシウムとリンが象牙質とエナメル質の結晶に認められた